
風神様《カザガミサマ》が翔る空

夢幻の破片

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カザガミサマ
風神様が翔る空

【Nコード】

N0737D

【作者名】

夢幻の破片

【あらすじ】

空から落ちてきた。なにがって？隕石でもない。飛行機でもない。じゃあなんなんだって？それは……………。

風の始まり　　く墜落した風神？く（前書き）

この小説は、話によってジャンルが大幅に、そしてランダムに変化します。それだけは忘れないで下さい。

風の始まり　く墜落した風神？く

両親が他界して何年経ったのだろうか…。

自分が小さい時に交通事故で死んだのだ。

今は十七、両親が死んだのは俺が四つの時だから…、そう、十三年経ったんだ。俺の名前は桜籠璽さくらかみ 灯也。

今、桜籠神社という、神社の神主をしている。

何故こんな歳で神主をしているか、頭のいい人は納得するだろう。

そう、先に述べた通り、両親が他界したからだ。

父さんも神主をやっていた。桜籠璽家は代々この神社を継いできた。大体、三十から四十才の内に次の代の者に神主を交替してきたらしい。

しかし、父さんは交通事故で死んでしまった。

だから、自分が代わりに神主をしている。

幸い、山奥のひっそりとした神社だから、参拝する人も少ない。

自分がしっかりしていれば大丈夫だ。

お金は、…両親がかけていた生命保険とやらのお陰で、腐るほどある。

…自分や爺さんや婆さんが使いきれないくらいに。

神社はそれぞれ祀まつっている神がある。

桜籠神社が祀っているのは風神だ。

ほら、稲荷像がある神社があるだろう？

あれは九尾の狐、玉藻の前を祀っている証だ。

桜籠神社には鴉天狗の像がある。

鴉天狗は風神級の風を起こせることから、一部で風神と言われている。

この桜籠神社もその一部に入る。

都内の神社は雷神、先に述べた九尾の狐等、様々な神を祀っている。

まあ、そんなことは参拝する人々には関係ないだろうが。

「…ふう、もう落ち葉は無いな。さて、お茶でも飲もうか…。」

…自分で言うのもなんだが、神社を継ぐため自分は高校には行っていない。

そのため、最近の流行やその他色々なことに疎い。

たまに来る幼なじみや中学時代の友人達によく、 爺臭い と言われている。

…確かに、ジュースよりお茶が好きだし、縁側で日向ぼっこが趣味だ。…まあ、そんなことは置いておこう。

夜の事だった。

ヒュ~~~~~~~~ン……ズドン!!…と、物凄い音がした。

隕石?と思つて、落下地点だと思われる裏庭に行つてみた。

…そこで、自分は凄まじい光景を目の当りにした。

まず、黒っぽい羽が散乱していた。

次に、辺りが水浸しだった。

そして、池には…女の子が、落ちていた。…溺れている、と言った方が正しいのだろうか?

思いつき足がつく浅さのはずなのに、ガボガボ…といって両手をばたばたさせていた。

黙つて見ているのもなんだか可哀想になつてきたので、池から引き上げてやった。

「ガハッ!ゴボッ!ガッ!ハア…ハア…ハア…。」

…どうやら本当に溺れていたらしい。

「あ、あり、ありりがとう、ゴボッ!ございます!」

「落ち着いて、落ち着いて。大丈夫かい?」 危なっかしい少女である。

「はい、お陰さまで。」

…復活も早いらしい。

「どうしたの？…というより、この状況は…？」

状況確認。

「はい、すいません。落ちてしまいました。」

た。」

そして意味不明。

「…落ちた？」

「はい、空を飛んでいたらいきなり羽が小さくなって、飛べなくなつて、落ちました。」

「羽？空を飛ぶ？」

少女の背中を見ている。…小さい黒い羽がピコピコと動いていた。

「…君は…？」

「えっと、かざみどり あや風見鳥 彩です。単刀直入単純明快に言いますと、鴉天狗兼風神です。」

いや、いっぺんに言われても…風神？

「…羽は作り物じゃあ無いようだし…本物？」

一応確認。

「はい。本物です。」 見事中。

「…えっと、どっちなのかな？えと、鴉天狗なのかな？それとも、風神なのかな…？」

「え〜っと、鴉天狗が風神という仕事をしていると解釈して下さい。私はまどろっこしいので、神としての風神ふうじんとは言わずに、仕事としての風神、風神と、訓読みで呼んでいます。」

…近頃の神は仕事なのか？

「…で、その力ザガミの君が、なんで空から落ちたの？飛べるんじゃないの？」

「さあ…？多分、羽が小さくなったのは鴉天狗の力とは関係無いはずなので、風神としての力が弱まったんじゃないかと思います。」

「…なるほど。別々なんだ。…その風神の力が弱くなった原因ってわかる？」

疑問だらけである。

「…神の力って、神社や寺と同じなんですよ。」　「ごめん、わからない。」

「ほら、神社や寺って、参拝する人が多ければ多いほど比例して大きく華やかになりますよね？」

確かに。

「神も同じで、信仰する人が多ければ多いほど比例して力が大きくなるんです。」

…とゆうことは？

「つまり、風神を信仰する人が少なくなったから、風神としての力が少なくなって飛べなくなっただと？」

「はい。多分そうです。」

…いや、ちよつと待て？

「鴉天狗も飛べるんじゃない？」

彩は衝撃を受けた様な顔をして…

「っ！！確かにそうです！！…ってことはもしかして鴉天狗としての力も弱くなっただことですか！？うわ~~~~ん！！」

…泣きだした。

慰めようと声を出そうとして口を開いた。

…が、しかし。

今の所、すぐに空に帰してやれる訳もなく、その、鴉天狗の力を元に戻してやれるわけでもない。

変な慰めはかえって彼女を傷つけるのでは…？

…そう、思った。

三分後

ようやく泣き止んだ彩が、ポロリと一言呟いた。

『どうしよう…。何処にも行く宛てないし、雷神ちゃん達にも迷惑かけたくないし…あうううう…。』

…しっかり聞こえてるよ。…雷神？

…あっ…そういえば…

飛べなくなった第一理由として、信仰の力（神としての力：神力？）が足りなくなっただのが原因だったはず。

…と、いうことはつまり、風神を信仰する人を増やせばいいんじゃない？

もしそうだとしたら、ここはうつてつけの場所じゃないか。

「じゃあさ、ここでしばらく一緒に居ないかい？」

「…ふえ？」

「ほら、ここ神社だしさ、君が協力してくれれば参拝客を増やせるかもしれない。なんの偶然かわからないけど、一応風神を信仰してるんだ。この神社。ね。君は力を取り戻す。さらに神社は評判になる。…お互いに一石二鳥じゃないか。」

彩は半泣き声で、しかし嬉しそうな顔をして、

「いいんですか…？ 自慢じゃないですけど、私よく他の神からてんねんとか どじ とか言われるんです。…えっと…？」

「灯也。桜朧璽灯也だよ。」

「あ、すいません。…その、灯也さんに迷惑をかけてしまうかもしれませんが、そんな私でも…いいんですか…？」

もじもじと妙に可愛らしい仕草をしながら、心配そうに尋ねてくる。そんな彼女が可愛くて、つい、こんな言葉を口からこぼしてしまっ

た。
「別にいいよ。…何ていうかさ、寂しい…って訳じゃないんだけど一人きりってつまなくてさ。一人で居るより二人のほうが…なんていうか…楽しいと思うから、ね。」

彩は泣きだしながら…

「…うつく、ひつく、ふえええ…ん！！ありがとうございます！す！！ちゃんと働きますう！！この恩は忘れません！！」

…いや、そんな大袈裟な。

…とまあ、こんな感じである。つい昨日

のことだ。

そして隣には…

「えへへ…灯也さん…。」

と、彩が自分に寄り添っているのだった。

…これから、どうなるのだろうか…？

無事に、彩を空に帰してやれるのだろうか…？

…そんな思いが頭をよぎっていた。

…序の風…了…

風の始まり　く墜落した風神？く（後書き）

…ホント、どうなるんでしょうね？（作者もわからない。）

一の風　く協力者なのか恋敵なのか…く

「シュークリーム二つ下さい！」

店内に透き通った元気な声が響いた。

何事か？と思つて声の発生源を見やる他の客。

少し、はりきりすぎたかな？

そう思い、声の音量を少し絞る。

「はい。シュークリーム二つ。」

店員のおじさんがシュークリームを渡してくれた。

「ありがとうございます。…はい、三百円。」

お代を渡す。

「ちようどね。…いやあ、いつもいつもありがとね。…彼氏に渡すのかい？」

結構フレンドリイである。

「いや、か、かか、彼氏だなんて、灯也はそんな…。」

そんなに顔真つ赤にして個人名出した時点でバレバレだよ。

「そ、そそ、それじゃ！またね、おじさん！」

少女が店を出た後…

「ふう…。しかし、その灯也君とやらも幸せ者だなあ。あんな可愛い子にあれだけ好かれてるんだから…。羨ましい限りだね。」

…あ、そうそ

う、紹介が遅れたね。

この歌姫なのか元気つ子なのかよくわからない長髪の少女。

名前は水無月^{みなづき}神流^{かなな}という。

灯也の幼なじみで、…見ての通り、彼にベタ惚れである。

部活の無い日はいつもお菓子を持って彼の居る神社に足を運ぶのである。

…がしかし、ここまでされても灯也は彼女が自分に惚れていると気付いていない。

…いわゆる鈍いというやつである。（それも半端なく。）
そして彼女は今日も桜籠神社に足を運ぶのである。
…また二人で縁側で座ってお菓子を食べながら手を繋ぐため。
…がしかし大半の人が想像している通り、今回はそうはいかなかった。

神社の鳥居を

潜る。

灯也を呼ぼうと声を出す。

「おい、灯也！きーたーよー！！」

…と、いつもならここで灯也が返事をするのである。

…がしかし、今日はかわりにこんな音が聞こえてきた。

ズンガラガツツシャーーン…パリン…コロコロ…

「……………は？」

今のは明らかに何かを落として盛大に割った音である…しかも、この音の大きさから考えて半端な量ではないはず。

まさか、灯也に何かあったのでは！？

そう思った瞬間には足がもう駆け出していた。

…そして、音のしていたと思われる部屋につく。

「ああ…あああああ…！！」

顔が青くなる。

人一人簡単に埋まってしまふ程の量の皿の山が崩れ落ちていた。

「灯也！！」

皿を退かそうとして皿に手をかけたその時。

「彩！どうした！！…ん？やあ、神流。来てたのか…ってなんだその皿の山は！！」

「ふえええ…すいませ〜ん。皿を洗った後山にして積み上げていたら、ぐらぐらしていたのに気付かなくて…で、こうなっちゃいましたあ…。」

「そんなことはどうでもいいんだ！！怪我は無いか！！…あつ！腕切

つてるじゃないか！！待ってろ、包帯持ってくるからな！！」

ドタドタと音をたて、灯也が包帯を取りに走ってゆく。

…そして残った二人。

「……………誰？」

「……………ふえ？」

…自分が来な

かった一週間の間に何があつたのだろうか？

自分の想い人が、いつのまにか自分より可愛い女の子と同居（同棲？）している。

…何度首を傾げてもわからない。

いや、その子（彩と言うらしい）が 空から落ちてきた という話は聞いたが、どうも怪しい。

…けれど、その子の背中の小さい翼を見る限り、とても作り物とは思えない。

…でも、納得いかない。

でもだからってその子をどこかにやる宛も無い。

ましてや、自分の家に見知らぬ他人を住まわすなどと、馬鹿なことできない。

…こついつのを八方塞がりというのかな？

「あの…どうかしましたか？」

「え？…………いや、別に。何でもないわよ？」

「……………そうですか？何か、俯いていたので…。」

「俺もそう思ったぞ。どうした？腹が痛いのか？」

灯也のことではやんでるんでしょうが！！

…いけない、怒ると灯也に嫌われる…。

「うっん、大丈夫。ありがと灯也。」

「……………そうか？いや、別に大丈夫ならいいんだが…。」

三分後

「…で、今は服で翼を隠して人界（じうち）の常識を灯也習ってるってわけ？」

「はい。そうです。でも、毎回灯也さんに迷惑をかけてしまってます。」

彩が萎みながら答える。

「別に気にしてないよ。」

それを、灯也がフオローする。

「…ただ、さっきみたいに彩が怪我したりしなければいいんだけどね…。」

…突き落としたいのか？あんたは？

「ふええ…すいません…。」

「まあ、とにかく。ちゃんとこつちの常識を覚えたら、今度は参拝客集めするってこと？」

「そうなんだよ。常識が云々より、参拝客集めがうまくいくかどうかかわからないんだよなあ…。」

まあ、たまに抜けた行動をする彩にとって、常識も案外重要なのだが。

そんな事を考えていた灯也に返ってきた言葉は意外なものだった。

「なら、私も手伝うわ。」

「！…いいのか？」

「本当ですか！？」

彩の顔が一瞬にして明るくなる。

「まあ…ね、いつもここに来てるし、部活無い日は来れるから。」

それに、ここに来る口実も増えるし。」

「そうか、ありがとう。」

灯也が微笑むと神流の顔が瞬く間に赤く染まった。

「べ、べべべ、別にあんたのためじゃないからね！？彩のためなんだから！！」

「神流さん…ありがとうございます。」

彩を早く空に返してまた灯也と二人きりになる　という下心があった神流にとって、素直に感謝する彩の言葉は微妙に耳に痛かった。

}

の
風
了

一の風　ゝ協力者なのか恋敵なのか…ゝ（後書き）

どんなラブコメでも必ずでてくるタイプの奴がきましたよ…。（作者風邪気味）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0737d/>

風神様《カザガミサマ》が翔る空

2010年10月15日09時10分発行